

子どもの心の育て方（佐々木正美）を読んで

私は放課後児童クラブ支援員として、「こどもたちの心を育成する」ことを最大の目標として日々取り組んでいます。そのために、多くの書籍を参考としながら、日々の児童保育を行っています。今回は、佐々木正美先生の著書「子どもの心の育て方」を読んで学んだキーワードをまとめさせて頂きました。この著書により、私が日々考えて取り組んできたことが間違いでなかったと確信することができました。是非、こどもたちのお世話をする指導員・支援員の皆様も、この著書を読んで頂き、こどもたちの心を愛情で満たしてあげてほしいと思います。（2024年10月20日 南側晃一）

#### 佐々木正美先生の言葉

こどもに早くから「自立心」「や「主体性」を身に着けさせようとして、厳しくしつけをしたり、泣いてもあえて抱かなかったり、ということをするのは間違いです。こどもの求めになんでも応じる、つまり「泣いたら飛んでいって抱く」といったことをできるかぎり繰り返すことで、こどもは自他に対して「絶対的な信頼感」を知ります。それがなければ「自立心」は育ちません。そして「自立心」がなければ自発性、主体性も生まれません。

自立というのは、自分ひとりで孤立して生活することではありません。社会の中で、主体性と協調性をもって暮らしていくことが「自立している」ということです。人に頼ることもあれば、頼られることもある。自分と相手の個性や、能力を考えながらバランスのとれた行動をとれるのが自立で、なんでも自分ひとりですることが自立ではありません。社会的に自立して行動できる人というのは、周囲の人との調和のなかで何かをすることができる人です。人との関係のなかで主体性をも発揮できることが自立です。そのためには人を信じ、自分を信じる必要があります。

「過保護」とか「過干渉」という言葉がよく出てきます。「過保護」は、こどもが望むとおりになんでもしてあげ過ぎること、「過干渉」は、こどもが望んでいないけれど親が一方的に「こうしたほうがいい」と思うことを言ったり、したりすることです。

過保護を恐れる親というのは、干渉したがる親です。こどもというのは、親の過剰な干渉を受けると欲求不満になってしまいます。本当に危険な事や他人に大きな迷惑をかけること、悪いことは、やってはいけないよ、と教えなければいけません。けれど、そうでないなら、なんでもいうことを聞いてあげたらいいのです。こどもの望みどおりに手をかけすぎたら、こどもがダメになるなんてことは基本的にあり得ません。

こどもの本当の成長力、発達力、自立する力を信頼することです。こどもの力を信頼できないから、過干渉になってしまうのです。こどもの能力以上のものを期待する親もまた過干渉になります。期待ばかりして過干渉にならず、保護的に育ててあげることを心がけてください。

人間は、やさしくしてもらった経験がないと、けっして他人に対してやさしくなることはできません。親がこどもにやさしくすれば、こどもは必ず人にやさしくなれます。家族みんなに愛されて育った人は、きっと人を深く愛することができるようになります。

以上